駒澤大學佛教學部論集第二十二號　平成三年十月

無適・橋田邦彦における「行」について

松本　晧一

一　はじめに

前もってお断りしたいのは、本稿が橋田邦彦（一八八二―一九四五）と『正法眼藏』との関係についての考察の一部であり、一連の「教育者」型人格と宗教受容の研究課題につながるものであるということである。

すぐれた実験生理学者であると同時に『正法眼藏釋意』（四巻）の著者として知られるように『眼藏』から深く影響され、しかも科学者の立場を踏まえて「行」「学」「道」といった東洋的・禅的な問題に独自な見解を示したのが橋田であった。(1)

しかもその独自な見解を、私人の「行」として自らの人生に実践したのみならず、昭和前半期（戦前・戦中）という最も多難な時代に、その信念を「道」として教育・研究・教育行政の公的立場でも貫ぬいた。そのゆえに最後は自ら死をもって責任をとらざるをえなかった事実が示すように、橋田はまさにその「時代」と離れては語れない人間である。

彼の時代とは国家観・国民意識・社会体制などさまざまな価値観が大きく変った今日、橋田を批判することは容易であろう。それはまた避けてはならない問題でもある。

したがって、今なにゆえに橋田邦彦なのか、という本稿への疑問も当然あることと思う。その問いに答えるべく公私にわたる橋田の考え方・生き方の意義を社会史的に批判もしなければならないが、今回はとくにそれには触れないことにしたい。

その理由は、それらについては橋田の人間像全体のなかで検証したく、彼の生活史展開の記述とも併せて別稿を考えているからである。この小論はあくまでも表題の内容である「行」についての問題に限定し、まず虚心に橋田の言うところを聴くことから始めようと思う。

二　行としての科学

最初から私事にふれて恐縮であるが、筆者の旧制中学時代の後期は太平洋戦争の戦局が最も苛烈なときであった。その少し前から「科学する」ということがしきりに言われてきた。

「哲学とは哲学する（フィロゾフィーレン）」ことと語呂合わせ的な感もなきにしもあらずだが、時局の緊迫にともない高度国防国家建設へ国民の総力を結集するスローガンともなっていた。

この科学という名詞を「科学する」と動詞化した用法は、体・用両機能を統合した全機現としての道元の言語世界を思わせるように、『正法眼蔵』の影響をふかく受けた橋田の発想にもとずくものである。少くとも後述する橋田の「行としての科学」の発想と信念とをそこに看過することはできない。

「行としての科学」つまり「科学する」という言葉は、時局即応のスローガンとして皮相的には国民各層に広く受け入れられる結果にはなった。

しかし誤解されなきよう願いたいのは、当時文教の責任者であった橋田が、時代迎合の言葉として急ぎこれを発案し、使用したのではないということである。

科学を「行」として行ずるにいたるまで、橋田には長い道程があった。

その第一歩は第一次世界大戦後の軍縮・国際協調という国内的にはむしろ平和・不況の時代に始められている。学としての「行」が国家的スローガンとして取り上げられるのは、それから十数年後であることを思うべきである。

今回はそうした思想形成の過程にふれるのが本筋ではないが、科学者としての橋田邦彦に大きな思想的影響を与えたものとして王陽明の『伝習録』と道元の『正法眼蔵』があげられる。

陽明学は家庭で薫陶された幼少時代から大学卒業後の欧州留学時代を通じてその後も一貫し、『正法眼蔵』は東京帝国大学医学部で生理学を担当する前後（大正八年助教授・十一年教授）のころより親しみはじめ、遂に彼の生涯の書となった。

橋田はこれら座右の書をあくまでも学者らしく「色読」し、とくに後者は註解書も巾広く渉猟して丹念に読みこんでいる。その眼光にはただならぬものがあると言っても過言ではない。書誌学的にもかなりの造詣を深めてはいるが、それらについては別の機会で述べる予定である。

橋田には直接具体的に参禅した体験はない。杉靖三郎氏の記すところによると、東京参玄会に間宮英宗師（一八七一―

一九四五）の前座をつとめるという形で参加していたと言うが、同会は坐禅よりも講話聞法の場であったらしく、また橋田にとって間宮師が直接に参禅の師でもなかったらしい。(2)

それよりも人から問われて、自らは坐ったことがないと明確に答えている。坐禅を第一義とする道元の徒としては凡そ不可解なところであるが、この点も橋田にとっては明快である。

しかしそれは坐禅を否定しているのではない。むしろ彼は、出家道の修行としては積極的に只管の打坐を評価しているのである。

ただ出家・在家の分別を明らかにし、自らは出家者としての道元の弟子ではないと自覚する橋田は、ひたすら『眼蔵』の文字の中に道元を追い求めたのである。(3)

およそ不立文字の禅家では、祖録のたぐいは須らく「身読」もってすべきことをたてまえとしている。これに対し、ひたすら文字を追って道元に迫った橋田の態度にはそれなりの限界があることも事実であろう。

しかし学問の世界で論理と概念の中で生きてきた橋田にとっては、正確なる「色讀」を精進することもまた「行」であった。つまり学者橋田の「学」は「行」であり、それは出家者の坐禅と変りがなかったのである。この意味で「色読」は、また「身読」であり「体読」「心読」の味到であった。

橋田には「生理学をするものにとって、生きているということは如何なることか」という大きな公案があった。「それが判らなくては、どうにもならない」という生理学者としての自覚から発したものである。陽明学から『眼蔵』への関心の転化、橋田が『眼蔵』と出逢う機縁はここに発したのであるが、この詳細も別稿にゆずる。

ただ一言すると、橋田が最初手にした『眼蔵』関係の書物には、『正法眼蔵』と共に東大図書館から借り出した『正法眼蔵御抄』の写本がある。この写本のはじめには慧輪玄亮による序文があり、そこには筆写に由来するいくたの苦心や精進が記されてあった。

慧輪「模写正法眼蔵鈔来由」と言われる文を拝読した橋田は、わざわざそれを書き取ると共に「…実に感概無量…中略…今でもそれを思い出すと熱い涙を禁ずることができない」と記している。(4)

橋田が目にした東大図書館の写本はその後関東大震災で焼失したが、慧輪の序文は『正法眼蔵蒐書大成』（二十一巻）に収録されていることを河村孝道教授から教示された。同『大成』には、慧輪によるものとしての三通りの序文が並載されているが、(5)いずれにも六十九才の老境を前にして『御抄』書写の顚末を「能ク識取シ得ルノハ我一人」とする慧輪の胸中が吐露されている。それによって我々もまた何が橋田に感涙

を催させたのかを知ることができる。

「御抄」の活字本は明治三十六年に刊行されたが、それまでは写本に頼るほかはなかった。

しかも知られているように原本は、豊後の泉福寺に永らく秘蔵されていたので、その閲覧や筆写はきわめて困難だったのである。

「正法眼蔵が何故私の学問（註、生理学）に生命を与えてくれるか」と言うと、それは「思想とか哲学的体系とかいうものではなく、全巻いたるところで説かれている〝行〟ということ、それであります」と明言している。[6] 少くともそう感得した橋田には、『御抄』の写本が文字通り「行」の所産、いな書写という写行が「行」そのものとして受けとめられたのである。

それゆえにこそ「其の（註、写行の）精進努力に感涙した」のであって、橋田はその著『釋意』や『正法眼蔵の側面観』の中で、『眼蔵』の文献学的解説や道元禅師の小伝にもふれてはいるが、彼にとって最も重要なものは、そうしたものを超えたところの「私の見ている正法眼蔵が道元禅師の正法眼蔵であろうとなかろうと、それはいわば私にとっては全然用のないことで、私の学問というものはこの日々携えて離さない手を離さない正法眼蔵という文字に現われたものに依って生きている」ことの「現実の事実」なのだと言っている。[7]

大切なのは「現実の事実」、つまり人生、科学者・人間として生きることの働きだと言うことである。

東大医学部生理学教室のスタッフを中心に、月曜会・火曜会のちには改めた碧潭会などで、「行」と「科学」の一致を提唱したことはこの間の様子を語っていよう。比較的内輪でのこうした会は、橋田が時代の渦中に巻きこまれる以前の、少くとも昭和十年位までのことであったが、その後は時勢の赴くところ公的性格の場で講演することが多くなった。

こうした提唱や講演、折々にメモした『眼蔵』や科学への思い入れは、後日『釋意』（四巻）（一九三九―四九）のほか『碧潭集』（一九三四）『自然と人』（一九三六）『空月集』（一九三六）『行としての科学』（一九三九）として世に出るが、橋田は『眼蔵』に関するかぎりあくまでも専門家ではないことを弁え、自ら一科学の徒として参究したにすぎないことを明確にしている。

彼の『眼蔵』に対する立場はしばしば我観、私観・側面観と称したように、常に「私の学問」が日々携えて手離さない正法眼蔵という文字に現われているもので「生きている」という「事実」から離れたものではなかった。この精神は、死後しばらくして門弟の杉靖三郎氏によって編輯された遺著『正法眼蔵の側面観』（一九七〇）のタイトルにも生かされている。

橋田は自らの立場を決して全面観とは言わなかったが、その「側面観」や「我観」「私観」が単なる部分としての一面観でないことは言うまでもなかろう。実験生理学者としての橋田には、部分と全体との有機的関係は実証的にも十分知りつくされていたはずである。「生きている」ということは単なる部分の集合ではなく、機能的統合の全体としてあるということである。「働き」ということを最も重視する橋田にとっては、科学者というその「一面」の全機能を全現する以外、彼の「行」はなかった。『眼蔵』に対しては、この科学者としての自覚から、いわゆる『眼蔵』専門家に対して謙虚に『側面観』と言っているのであって、自身は全身心を挙げての全人としての参究に外ならない。この意味で「側面観」は、実に彼における「全面観」「正面観」である。

その全面観の観とは、後に述べるような「観」として成りたつ。

橋田は『釋意』第一巻の序の中で次のように述べている。

『正法眼蔵』に親しむこと爾来二十四年生理学者としての体認を廻光返照して聊か「生の全機」と「者」の何たるかを識り、日本科学の根源を見出し得て無上の喜税と感激ともに溢れて居る。其の間眼力未到なるにも拘らず、同志同道の人々に向って文字を釋し句意を繹ぶること十余年、恬として耻づる所なく敢て試みて今に到れる所以のものは、この喜悦を頒ちこの感激を俱にせんことの念切にして止み難いからである。…中略…近時『眼蔵』が宗門を跳出して諸方の注目と関心とを得来ったことは誠に喜びに堪えない所である。併し云うまでもなく『眼蔵』は色読味到すべきものであり、しも『眼蔵』は彌々高く彌々堅い。志操堅固の士にあらずんば決して之を読破することは出来ない。所謂研究によって『眼蔵』が錯り弄ばれることのなからんことを切に警めなければならない…後略[8]

筆者が強調したいのは、右の文中の最後の数行である。橋田はいわゆるの学、つまり研究として『眼蔵』に取組んでいるのではない。

科学者としての学を、「学」よりも「道」として「行ずる」ことの参究が第一であった。それは学者の「学」を透脱して「者」に徹するところに成るのであるが、それは後に述べることにする。

いずれにせよ橋田は自らの問題として『眼蔵』に参究し得た喜びを同志同道の人々に語ったのであり、これに対して宗学の立場から、学的研究として評価や期待をもつということは筋違いと言えるであろう。また同時に、門外漢の参究成果として、その意義を黙殺するのも又あやまりと言わねばならない。

この点を踏まえて、橋田が「行」をどのように捉えているかを見てみよう。

昭和が激動の時代であったとは今日誰でも回顧するところである。

しかし昭和十一年（一九三六）と言えば、一月に我国はロンドン軍縮会議を脱退し、翌二月には二・二六事件が起こり、三月はロカルノ条約を破棄したドイツのラインランド進駐があった。六月は電力国家管理案が発表されて財界動揺すと言われ、年の暮には後の日本の運命を決した日独伊防共協定が調印されている。中国大陸での戦火は開かれていなかったが日貨ボイコットが叫ばれ、国の内外は極度に緊迫し、いわゆる非常時の一語に尽きていた時代である。とくに国内的には自由主義者や左翼文化団体への弾圧、ひとのみち教団幹部の検挙などに伍して、日本諸学振興委員会の設置や「国策の基準」決定、国体明徴運動の声が全国的に高まっていた。

この年、五十四才の橋田は東大医学部教授として研究者・教育者の現職にあった。もともと研究者であると同時に「教育者」型人格[9]としての素養も豊かであった橋田ではあるが、更にその度を強めて教育者へと傾斜するのは、翌十二年四月第一高等学校長となってからである。

それ以前の昭和九年、斉藤（実）内閣は反国家思想対策として文部省学生部を思想局に改組し、翌十年橋田は和辻哲郎ら七名と共に思想視学委員に任命されている。そして更に、研究・実験の大学から全国高等学校のナンバーワンと目された学校の長として、思想善導を含む青年教育に意欲的に取り組んだことは、彼の人格構造が学者の「学」と共に教育者の「者」にも豊かであることを示すものであろう。後にであるが橋田は「者」の何たるかを識ったと言っている。「者」とは、抽象的な「学」が単なる技巧や技術以上に人の人たる働きとなった「術」の実践主体である。

しかしその教育の者としての彼が、更に教育行政官への傾向を強めるのは、昭和十五年慫慂されて第二次近衛内閣の文相として入閣してからのことである。そして遂に対米英開戦時の東条内閣に留任し、戦時教育体制への刷新改革に深く関わった。

しかし昭和十一年当時の橋田は、まだ文教の極にいる教育行政官としてではなく、現場で教育と研究を行ずる大学教授の地位にあった。

しかし従来から蓄積醸成されつつあった彼の「行・学」の持論は、まさに時節因縁の到来としか思えないような形で時流に迎えられようとしていた。

この年の十一月十一日、文部省教学局主催の日本文化研究講習会自然科学科第一回講習会で、橋田は「行としての科学」と題し講演を行なった。その内容は山極一三氏の編により他論稿と共に一本にまとめられ、同じの書名で刊行されて

いる。[10]ここでは事実認識の一歩として、まずその講演要旨を脈絡を辿ってみることにしたい。

その前に、橋田の生理学につき一考しなければならない。橋田の専門は電氣生理学と言われる生理学の一分野である。橋田にとって、生理学とはどのように定義にされているか、その著『生理学要綱』について見てみよう。

筆者が手にしたのは増訂第八版（一九三五）であるが、著者が「第六版序」として明記するように、編述の主旨においては第一版（一九二三）と変るところはないと言う。[11]したがって、これによっても生理学に対する橋田の一貫した態度を知ることができよう。

彼はその「緒論」において次のように述べている。

まず physiology を生機学と称し、その対象である生命現象の研究に物理学的方法・化学的方法があるとし、そこに生理学 biophysics、生化学 biochemistry が成り立つ。生命現象とは生体のさまざまな functions の総括であるが、functions の訳語に官能を当て、これを運動・知覚のごとき動物性官能と栄養・生長・繁殖のように両者共通の植物性官能とに分け、これら生体の諸活動はあくまでも「全一態トシテ、自己維持 Selbsterhaltung」の働き、つまり「全機性の実現」とみる。

生命現象の主要な三様態「物質代謝・勢力（エネルギー）転換・形態変化」もまた「渾然タル全一態トシテ全機を現前セシメルモノ」である言う。

したがって、この全一態の一部を個別に考察するのは、單に研究上の「便宜ノタメニ過ギナイ」のである。更に、この生機学上の理解がなければ、生物学の他の領域である形態学や発生学もまた眞の学問的基礎は得られないだろうと言っている。

これらをみると、すぐに読者は「全機」の巻をはじめとする『眼蔵』の世界との関連を予想されるであろうが、それらは別途の叙述にゆずりたく、ここでは、橋田がこうしたユニークな科学者であったことを認識する必要だけに留めておく。

以上の点を踏えて、彼の講演内容に入ると、この科学者としての橋田にとって、学者の務めとは専門の学を伝授することではなくて、「学問する」ことを教えることにあると言う。「学問する」とは学者という人間の働きであって、師資相承と言うごときは人間の働きの伝授、つまり全人格を師から弟子へ移し伝えることにほかならない。

「相見」とは禪修行の場での用語であるが、とくに橋田はこの語において、人間の一部が相接するのではなく、常に全として働く人間の「働き全体」つまり全機として相互合体であ

り、このときはじめて師資相承が現成すると言う。[12]

これが「学問する」ことの伝授であり、この全機としての人間の働きは抽象的観念的なものではなく、つねに具体的個性的に存するのであり、すなわち、人格にほかならない。言いかえると「学問する」という動詞形での把握は、つねに具体的人格としての実践主体を離れてはありえなぬということである。

このことは自然科学者としての働きにおいても例外ではない。では、自然科学者の人格的活動とは如何なるものかと言うと、研究方法及び研究者の働き方のいずれにおいても「観察」（みること）に尽きると言う。

この「観・察」のなかに「つまびらかにする、あきらかにする」等一切の働きをみ、これを「心で観る」という表現で説明している。この一見きわめて非科学的な表現で人間活動としての「観る」ことを捉え、これ以外にみる方法はないと言うのである。[13]

甚だ判りにくいところなので橋田の言葉を要約することで説明したい。

「心で観る」という「心」とは主観対客観という意味での主観ではない。科学はすべてのものを対象化して客観的妥当性を追求するが、観られる客体というものは、観る主体がなければ成立しない。したがって科学も「客」に対する「主」としての人間の働きがなくては成立しない。もし科学が単に客観的妥当性の主張のみに留まっておれば、客観に対する主観の問題が取り残されることになる。

いわゆる人文（文化）科学は右の立場からすると、「主」としての人間の働きを観察するところに成立するのであるが、これとても科学として客観的妥当性を求めるかぎり、橋田が呼んで「人生」という「人間の働き」を「客」として観察することにほかならず、依然として「主」は取り残される。自然・自文のいずれにしても科学的解析の立場では、「主」という「人間の働き＝人生」の問題はどこまでも残らざるをえないと見る。[14]自然とは「客」として観られるもののみでなく、観るものとしての「主」を含んでいないかぎり抽象的なものにすぎないとする。

このようにして橋田にとっての科学とは、客観的に見られたものが正しくても、それを言う主観の働きが正しく働いていなければ意味がないのである。したがってその主観の働きの正・否を対象的に批判すれば、更に批判の「主」としての主観の働きが必要となり、無限の繰り返しとならざるをえない。

そこでこの果てしない循環を断ち切るために、どうしても上述した「観」つまり「心で観る」ことが必要となる。この

東洋的な表現が、科学者橋田にとって適切であるかどうかは判らない。恐らく無用の誤解の一因となり、橋田理解のネックとはなっているであろう。

しかしここにおいて「観るもの」「観られるもの」の対立が解消し、そこに唯「観る」ことだけがあるということになる。主観的世界・客観的世界と区別するのは、「学」として要求されるものであり、与えられる「あるもの」は、志向的客体と意識の機能的側面も一つ、ノエマ・ノエシス一つの世界となる。彼はこれを「唯観」と称し、自然科学とは「唯観」の現成とみるのである。つまり主客一体であるが単なる混沌（カオス）としての主客未分ではなく、客観という「観」のなかに「主」の「観る」働きが含まれており、主観の「観」に「客」の働きを含むというのであって、「働き」だけがあって「働くもの」がない「働き」である。(15)

この「唯観」と称せられる「働き」そのものは、具体的に人間を通して現われるだけである。そして具体的に体験（経験ではない）として現われるとき「観」は「行」となり、「唯観」は「唯行」となる。「行」とは人間も又その中に入っている自然（世界全体）の働きに随順することであり、彼はこれを「唯従自然」と呼んだ。そして彼に深く影響を与えた陽明学の知行合一も、この「唯観＝唯行」として受けとめられた。(16)

一見したところでは独断非合理的な信念とも受けとられ易いが、自然科学の観察もこの「唯観」が具体的にうごく働きとして行ぜられなければならない。この意味で橋田は、自然科学者をもって自然科学の「行者」であると言っている。自然科学を「行ずる」立場から把握しなければ、真の自然科学者ではないと言うのである。(17)

この「真の科学者」という表現には真・贋に関わる価値判断の態度がうかがわれるが、彼は決していわゆるの自然科学を贋ものとして否定しているのではない。この点は留意されねばならぬところである。

橋田に言わせると、概念的体系で固定されたいわゆるの自然科学は、この「行」としての自然科学の結果として当然現われてくるものに外ならない。決して贋の科学として斥けてはいないのである。むしろそれは「行」の科学によって、基礎を支えられる科学として肯定されている。

さて、このような橋田の科学観の特色は、彼が生命現象を研究の対象とした実験生理学者であったからであろうか。しかし彼が無機物を対象とした物理学のごとき研究者であっても、「科学する」ということに変りはなかったと思われる。

橋田が電気生理学の専門家として、物理学・数学に精通した有機・無機両分野にわたる優れた科学者であることは周知

の事実である。

左の引用文は第二回生機学談話会（一九三三・二）の席上、座談として記録されたものであるが、科学全般に全機観とも言うべきものをもっていたことが証されよう。

橋田は、物理学における全体性ということの問いに答え「因果性と全機性」につき次のように例証している。

一番よく引かれる例は emission と absorption 即ち輻射と吸収の話で、之は従来の考えで云えば輻射するものは勝手に輻射して居る。其の輻射の途中に吸収体があれば全く偶然的に吸収されると云うのであります。然るに実際の吸収の程度によって輻射の様子が異なる。それで emission と absorption は全体一つの process である。初めが emission、終りが absorption で、後に起る absorption が初めの emission を何らかの意味で規定しなければならぬということから（註、物理学を含む自然科学において）全体性の問題が起ったのであります。[18]

過ぎ去ったものを後から観るだけでなく、後なるものが先なるものを規定するという考え方は、当時、物理学を中心に発展した自然科学界では、一般に機械論的な決定論が支配的で、橋田が言うように量子力学が盛んになるまで、全体性・全機性の問題として主たる関心事とはならなかったのである。

橋田は「唯観・唯行」としての体験世界は、過去・未来を内にこめた真の時間としての「現在」があるのみで、それは既に道元禅師の「有時」や近年の西田哲学などが到達したところであると、機械論的決定論を強く批判する。[19]確かに西田哲学の盛んであった当時としては、非連続の連続としての時間の円環的構造は受け入れ易いところではあったろう。しかし「因果性と全機性」から、自然科学全般にこの問題の認識を喚起した人物として橋田は注目されてよいと思う。

「観」の働きの現成として行ぜられる「行の科学」は、彼にとってすべての科学を「科学」たらしめるべく根底から支えるものであった。彼はここに、学はすべて模倣から出発するが、模倣が単なる模倣でなく独創的なものになるためには、自己のものして「把む」こと、把握する人の具体的働きの重要性を強調する。事物の識得には勿論学としての分析も必要であるが、分析したものを綜合しても事物の具体的把握にはならないからである。むしろ逆に「はじめから事物は綜合されたものとして把握しておればこそ分析が可能だ」とする。

橋田はこの分析的立場を「格物」とみ、綜合的立場を「致知」と捉えているが、「知を致す」という実践つまり「行」の立場にたったとき、はじめて真の科学的知となると言う。

格物致知は『四書』の中の『大学』に出るところであるが、橋田にとっては陽明学の知行合一と変るところはない。

そして又、この分析的「格物」は、「自己をはこびて萬法

を修証する」ことであり、綜合的な「致知」は「萬法すすみて自己を修証する」ことであると「現成公案」を引くのである。[20]

分析的科学の根底にあって、それを支える働きの綜合的・全体的・全機的把握として橋田は、西欧的科学思考とは別な伝統の『伝習録』『正法眼蔵』等に代表される世界、つまり東洋宗教の「行」の働きに眼を開いたのである。

橋田は「私の専門としている生理学の本質が『眼蔵』を拝見することで確立した」と言い、「科学者がほんとうに自分の科学を力あらしめるためには『眼蔵』をよまなくてはならないと確信している」と述べ、自分の目指していることは『正法眼蔵』と科学との結びつけである」と記している。[21]科学的認識についてまわるアプリオリのアプリオリと言うどうどうめぐりを断ち切るためには、理性的思惟のアプリオリに立つ哲学もまた役に立たない。

かくて「萬法すすみて自己を修証する」というところに突き当ったと見るべきであろう。

今回は深くふれないが、ここに橋田が西欧的科学模倣の学から日本人として主体的に把握した科学の確立を主張した原点があり、それが不幸にして日本精神作興の時流と深く関わったとき、文相・教学錬成所々長といった地位と合まって、更に膨張肥大したことが彼の悲劇であった。

しかし私人としての橋田には特にファナティックな「日本主義者」としての主張はないと思う。確かに彼は日本主義者ではあった。烈々たる愛国の士であったことも疑えない。しかし愛国者であること自体は誰も責められるべきことではないだろう。ただ公人として彼がとった一連の戦時文教政策には、たとえば文相就任後早々にとった国民学校令公布、『臣民の道』発行から決戦教育措置要綱に至るまで、閉塞した状況打開のため国家中心の非常手段が講ぜられている。彼におけるこの公・私の二面性は、本質的には同質のものの二面なのか、それとも文字通り異質の二重構造なのか、今ここでは軽率に論じきれぬものがある。ただ間違いなく橋田は日本主義者だとしても、生命現象の筋みちを追って「学」を「行」として把握した「日本」的な科学者が中核像だと言うことができるように思える。

既成概念としての「日本主義者」の名において直ちに彼の人間像を評価することは、余りにも人間を観ることに一面的であるようだ。

たとえば橋田には、次のような側面もあるのである。当時、全体主義と言えば滔々として一世を風靡した国策思潮であったが、これに対しその枠内という限界はあるにせよ、彼は「一たび主義と云う形式に嵌ると色々な弊害が生じる可能性がある」と批判し、「部分が全体目的のために存するとい

う立前で捉える主義・論などの概念形式で自然科学の活動を律するのは無理である」とし、その立場から「或る前提の下に全体主義というものを論理的に作り上げて、それによって我国を動かそうとしてはいけない」とまで言っている。[22]これは戦時下の昭和十三年三月の発言である。この年には国家総動員法が発令されていることを思えば、彼がいわゆるの「日本主義者」単なる超国家主義者としての全体主義者でなかったこともうかがわれよう。

また、かつて其高等学校で行なわれたいわゆる赤化学生の放校処置について、次のように言ったこともある。

「そういう人こそ大事に面倒をみてやって導かねばならない。それを追放してそれで綺麗になったと思っている当局者の気がしれない。

他の人々への伝染を防ぐ為だというなら、追放と同時に自分も学校を辞めるべきだ。そしてそれら学生と行動を共にして導化に努力すべきだ」と。[23]

当時すべての教師が治安維持法下にあって学生の思想善導に責任をおわされていた。

橋田も同じくその一人であったが、ここには単に放校という国家権力を背景とした強権の行使ではなく、思想をこえた人間への思いやりがあり、上述した橋田の「教育者型」人間像の側面を補足するものがあろう。

以上は主として『行としての科学』に所収されたものを中心に、橋田における「学」と「行」との関係をみてきた。

彼の「行」としての「学」は更に展開し、「学」が真に行ぜられるとき「学」は脱落して、ひたすら行ずるのみの「者」となる。このとき「学」はまた透脱して「術」となる。「者」の具体的な働きが「術」であり、「術」の具体的な実践主体が「者」である。「術」とは単なる技術や技巧ではなく、「者」もまた学をふまえての「者」であり、それらの実践内容は「道」として完成される。したがって「学」と「道」は「学道」として一つであり、「道」に随順するところに「行」があるとする。「学・術・道」の三者は不可分でありながら、しかも「道」として現成されることを、彼は自らの専門である医の分野において説いた。[24]

したがって橋田にとって学問とは人が人となる活動であり、「道」を学すること「学道」にほかならない。橋田における「道」の問題は別稿の予定である。

冒頭のべたように橋田邦彦と『正法眼蔵』受用との関係を「教育者」型人格における禅受用の問題として考察する目的からすると、本稿はその一環として「行」を取り上げたにすぎず、次には「学」「道」の考察が続けられなければならな

い。その意味で本稿には続稿が予定されており、未完ということになる。橋田における「行・学・道」の問題は三者不可分で別個に論ぜられるものではない。今は便宜上「行」に限って述べたが、掲載誌は異なるにしても次の論稿によって補完されることにより、一人格の事例研究としての意義をもつものと思う。その上で筆者の意図する事例研究群の比較肢の中に組み入れることが可能となる。

三　あとがき

筆者が橋田の著作を一括して入手したのは戦後間もない頃である。用紙も装丁も余り上等とは言えず、その上戦中の橋田への反動評価もあって、一般に古書の高かった当時でもさほど高価ではなかったと覚えている。いずれ読もうとは思いながら長い間頁を開くこともなかった。しかし「戦後」という言葉も消えかかる頃、杉靖三郎氏編『正法眼蔵の側面観』が世に出たことで触発され、また日ごろ内科医の加藤慶之助博士から東大医学部における橋田の講義の様子などを聞く機会を得[25]、その人物像に非常な興味を抱かされた。橋田の講義は最初『眼蔵』の話から入って、おのずと生理学へ展開するということだった。こうしたことが機縁で橋田の著作を取りあげることにはなったが、なお直接の動因としては山内舜雄教授からのアドヴァイスがあったことにもよる。事例研究の対象として是非やる意義があるとの助言であった。

思うに同じ科学者でも、物理や数学系の学者には公案禅に関心を抱く傾向があるのに対し、生命現象の科学者には『眼蔵』に心惹かれる人が多いと感ぜられるのは何故であろうか。筆者は今資料をあげて、それを実証するだけの余裕はないが、念頭には絶えず橋田の存在が消え去らない。

さて改めて橋田の著作を読むにつれて、筆者にある一つの光景が甦ってきた。

橋田文相の時代（一九四〇～一九四三）戦況の緊迫化と共に、大学高専の修業年限短縮など学徒戦時動員体制が確立されている。いわゆる学徒出陣の壮行会は、昭和十八年十月二十三日橋田と代わった岡部長景文相の下、神宮外苑で行なわれたが、あの雨中の分列行進の映像が何故か橋田と重なって甦ってくるのである。征きしものは帰らずと言うのに、筆者は僅かの年齢差で戦場へ赴くことを免かれた。残ったものの「よろこび」も「うしろめたさ」も何時の間にか風化して消えた。ただ山内教授から助言を受けたとき、教授の世代こそ正に戦中派の代表であられたことを改めて思い出した。かつて同教授からあの時代を回想した『駒沢に竹波打ちて』の一書[26]を頂いたことも思い出した。また『駒沢大学百周年史』をみると、橋田文相の時代、東都の仏教系三大学合併案が出され、当時の山上曹源学長以下大いに苦慮されたということも

ある。[27]

橋田の研究には、われわれ世代にとってどうしてもさまざまな思いが重なる。それは同時代史における事例研究では程度の差はあれ避けられぬところであろう。しかしそれは克服されなければならぬところである。

（続）

註

(1)橋田邦彦、明治十五年三月十五日生、鳥取県倉吉市出身。旧姓藤田、無適と号す。第一高等学校、東京帝大医学部を経て独墺仏へ留学、実験生理学を学び帰国後、大正八年以降東京大学にて生理学を講ず。この頃より『正法眼蔵』に親しみ、行と科学の一致を提唱す。昭和十二年第一高等学校長、仝十五年第二次近衛内閣の文相、ひきつづき東条内閣に留任、十九年教学錬成所々長。二十年九月戦犯に指名され、同月十四日服毒自殺（六十三歳）。敷徳院殿仁誉主一無適大居士。詳細な生活史は別稿にゆずる。著書『碧潭集』（一九三四）、『空月集』（一九三六）、『自然と人』（一九三六）、（いずれも山極一三編）、『正法眼蔵釈意』（四巻・一九三九―一九四九）、『生理学要綱』（一九二三）など。

なお橋田についての小伝として杉靖三郎「正法眼蔵と橋田邦彦先生」（『正法眼蔵の側面観』一九七〇所収がある。

(2)仝前の『小伝』

(3)『空月集』一九三六岩波書店、四一六頁。第二回生機学談話会講演内容が同会会報第一輯からの転載として収録されている。

(4)『自然と人』一九三六、人文書院、二九九頁。同じく『正法眼蔵の側面観』一九七〇、大伝輪閣一一〇頁

(5)『正法眼蔵蒐書大成』二十一巻、八一〇頁以下。「模写正法眼蔵鈔耒由并偈」(1)、「書写正法眼蔵影室鈔序」(2)、「模写正法眼蔵鈔耒由」(3)の三通りが写真版で収録されている『御抄』は知られているように永い間豊後の泉福寺に秘蔵されていたため書写閲覧はきわめて困難であった。明治三十六年に刊行本が出たが、橋田が刊行本を手にしたのは書写本を見たのちである。また橋田は『曹洞宗全書』註解一、二の方も見ている。いずれにしても彼にとっては書写本『御妙』との出逢いは感動的であり、これを手がかり『正法眼蔵』を色読することになる。この点は『側面観』一一〇―一一二頁。

(6)『自然と人』三〇〇頁所収の「正法眼蔵の側面観」。これは昭和十一年十一月二十九日の仏教学会講演（於駒沢大学）。同講演は衛藤即応教授の講師紹介で始まっている。

(7)仝前三〇〇頁

(8)『正法眼蔵釋意』第一巻山喜房仏書林一九三九、序文

(9)「教育者」人格の概念規定は拙稿『「教育者」型人格における禅体験の受容と変容』（駒大仏教学部研究紀要、四十四号）、『「教育者」型人格における宗教体験と聖・俗の行動傾向』（仝四十七号）参照。

(10)『行としての科学』一九三九、一―五二頁

(11)『生理学要綱』富倉書店、一九三五、一―三頁

(12)相見・師資相承ということについては唐木順三も同様なことを言っている。有名なゴッホの「農夫の靴」を例として相見

底のリアリズムとし、人と人、人と物とが時節投来して同時契合のとき「我、人に逢う」がそのまま、「人、我に逢う」ことであり「人、ひとに逢う」ことに外ならないとしている。『唐木順三全集』五巻、この自己他己の回互転換は橋田もまた「法華転法華」等を引用して強調するところである。「我観正法眼蔵」（『側面観』一九〇頁

(13)『行としての科学』二五頁以下

(14)「正法眼蔵と科学者」（一九三八・八・二、永平寺大衆への講演内容）『正法眼蔵の側面観』所収、二三七頁以下

(15)『行としての科学』

(16)仝前、三一～三六頁

(17)仝前三三頁

(18)『空月集』四〇八頁

(19)『碧潭集』六六頁

(20)『行としての科学一三六頁以下。一九三八、三、教学局主催日本文化研究会講習会（自然科学科第二回講演）の「自然科学者の態度」として収録。

(21)『正法眼蔵の側面観』二三〇頁以下

(22)『行としての科学』一〇二頁

(23)『碧潭集』二四六頁

(24)『行としての科学』三〇〇頁以下。「医道について」、日本大学医学会（一九三七、十一、二十一）の講演内容が収録されている。

(25)埼玉県出身、旧制浦和高校、東大医学部卒。戦前は聖路加病院に勤められていた。仏教とくに禅への関心がふかく戦後は誠実な開業医として生涯を終えられたが、折にふれ橋田邦彦のことをのべられた。

(26)山内舜雄編『駒沢に竹波打ちて』現代駒沢精神史刊行会、一九六二

(27)『駒沢大学百周年史』下巻、四二七頁

P・S・本稿提出後、第四十二回日本印度学仏教学会において、「無適・橋田邦彦と正法眼蔵」と題し口述発表した。いずれ原稿論文も出るが、本稿との姉妹篇をなす。